

オンラインによる母性看護学実習の実践内容と今後の課題 ～授業後アンケートの分析から～

宝田慶子*、二村文子*、片岡優華、小平明日香、長沼貴美

創価大学 看護学部

Content of the online maternal nursing practicum and prospective problems ～ From analysis of post-class questionnaire ～

HOUTA Keiko*, NIMURA Fumiko*, KATAOKA Yuka,
KODAIRA Asuka, NAGANUMA Takami

Faculty of Nursing, SOKA university

* These authors contributed equally to this work.

キーワード：母性看護学、オンライン実習、授業後アンケート、大学生

Keywords: Maternal Nursing, Online practicum, Post-class questionnaire, University students

はじめに

本年、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染症拡大という未曾有の事態に伴い、高等教育の現場でも高等専門学校を含む大学全体の88.7%が4月からの授業開始を延期し、ほぼすべて（98.7%）で遠隔授業の実施を検討する方針という調査報告がなされた（文部科学省、2020）。A大学も例外ではなく2020年度春学期の授業がすべてオンライン授業となった。そして、東京都内の感染者の増加や、実習先の医療施設も感染者対応に追われている状況下において、A大学看護学部では、5月から7月に予

定されていた4年次における臨地実習の中止を余儀なくされた。

看護基礎教育における臨地実習が担う役割は大変大きく、保健師助産師看護師法に定められた看護師国家試験の受験資格取得のための必須科目であり、A大学看護学部でも文部科学省の規定に基づき4年間を通して23単位の実習が展開されている。母性看護学実習は4年次の春学期科目で、5月～7月の3か月の間に、1クール2週間の実習を5クール、5施設、計13グループ（82名）で展開する予定であった。4月7日に緊急事態宣言が発出され、教員及び学生は大学への入構が制限されることとなり、4月半ばには母性看護学実習の臨地実習の中止が決

定され、すべてオンラインによる母性看護学実習（以下、オンライン実習とする）を行う事となった。

オンライン実習に変更となったが、実習の目的や目標が変わることは無く、あくまでも臨地実習を想定した内容を検討する中、6月には、医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応に関する通達（文部科学省・厚生労働省，2020）があった。その内容は、実習施設や日程の変更を検討してもなお実習施設の確保が困難な場合は、「実状を踏まえ実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えないこと。」とし、看護師国家試験の受験資格にあたっては「当該学校養成所等において必要な単位もしくは時間を履修し、又は当該学校養成所等を必要な単位もしくは時間を履修して卒業（修了）した者については、従来どおり、各医療関係職種等の国家試験の受験資格が認められること。（中略）学校養成所等における教育内容の縮減を認めるものではないことから、学校養成所等にあつては、時間割の変更、補講授業、インターネット等を活用した学修、レポート課題の実施等により必要な教育が行われるよう、特段の配慮をお願いしたいこと。」というものであった。

以上の背景から、母性看護学実習の目的である「少子化時代における母子を取り巻く環境および、対象のニーズにあった母子への継続的支援の実際を学び、母子保健における今後の看護職の役割を考察する」を達成するために実習を計画し、全履修者である82名の学生を対象に2週間にわたるオンライン実習を行った。

今回は、感染症の拡大により、オンライン実習を行うこととなったが、災害大国である我が国においては、今後も対面授業や臨地実習が困難となる可能性を見据え、対応を検討していくことが求められる。そこで、2週間のオンライン実習の組み立てや展開等の概要をまとめ、学生から得られた授業後アンケートの回答をもと

に分析した。本研究は、オンライン実習という新たな取り組みへの有益な基礎資料になると考える。

I. 研究目的

オンラインで実施した母性看護学実習の実践内容と、学生から得られた授業後アンケートの回答をもとに、オンライン実習の目標の達成度と良かった点、難しかった点を明らかにし、今後の課題を報告する。

II. 用語の定義

本研究では、太田（2017）を参考に、看護過程の展開を以下のように定義する。

看護過程の展開：「アセスメント（観察・情報収集／情報の整理／分析・解釈／統合）」「看護診断」「看護計画」「実施」「評価」のサイクルで構成されるプロセス。

III. 研究方法

1. 対象者

対象者は、2020年度の母性看護学実習を履修した、A大学看護学部4年次生82名のうち、研究の趣旨と目的を理解し承諾の得られた学生とした。

2. 調査方法および内容

2020年度の母性看護学実習終了後、履修者全員に向けて、授業後アンケートおよび今回の調査に関する説明をオンライン上にて説明書と同意書を用いて口頭で行った。研究協力に同意が得られた学生は同意書をweb上で提出してもらい、研究協力の同意が得られない場合にも授業後アンケートには回答してもらえよう、授業後アンケートの冒頭に研究協力の意思を確認する質問を設けた。

このアンケートは、実習最終日の実習終了後

に、回答時間を設けた。加えて任意で行うため Zoom からの退室も自由とした。

調査内容は、全学で行われる授業後アンケートの内容に、母性看護学実習独自の項目を追加し、「2020年度母性看護学実習についてのアンケート」として実施した。実習の達成度や実習内容について（16項目）、実習環境と学習状況について（6項目）調査した。回答は「4：80%以上は達成できた（効果的だった／充実していた）」「3：60%以上80%未満は達成できた（効果的だった／充実していた）」「2：40%以上60%未満は達成できた（効果的だった／充実していた）」「1：20%以上40%未満は達成できた（効果的だった／充実していた）」「0：0%以上20%未満は達成できた（効果的だった／充実していた）」の5件法で求めた。また自由記述の項目を7項目設定した。

3. 分析方法

実習目標の達成度、知識に関する学習の達成度、学習方法の効果、実習全体の充実度について、回答者数やその割合を算出した。また、5件法で得られた回答を4点から0点として得点化し、平均点や標準偏差を算出した。

自由記述は、オンライン実習の授業内容に関する評価や改善点に関する内容を抽出し、コード化した。コードは、類似性に沿ってサブカテゴリー・カテゴリーを作成した。その過程は、複数の母性看護学の研究者で検討することで、研究結果の信頼性・妥当性の確保に努めた。また、コードごとに記述がみられた数を記述数とし、算出した。

4. 倫理的配慮

履修者全員に対し、Google フォームの研究説明書・同意書を用い、オンライン上にて口頭で、授業アンケート実施概要、研究目的、意義、方法、協力の自由意思、拒否権、利益、リスク、個人情報に関する保護に関する説明を行った。授業に関するアンケートであるため、成績評価

に影響する懸念が生じ、強制力が働くことが考えられるため、成績評価には影響しないこと、アンケートの回答は自由意志によるものであること、結果の公表の際にも個人が特定されることはないこと等あわせて説明を行った。アンケートの記載については、無記名で実施した。研究協力に同意が得られた学生は同意書を web 上で提出してもらい、データとして保管した。

また、オンライン実習にて使用した DVD や動画コンテンツは授業使用目的で提供されたものであった。YouTube 動画については配信元の許諾を得て使用した。本研究における利益相反は無い。

本研究は、創価大学「人を対象とする研究倫理委員会」の承認を受けた（承認番号：2020041）。

IV. 授業概要

1. 実習目標

すべてオンラインでの実習展開となったが、前述のとおり、「学校養成所等における教育内容の縮減を認めるものではない（文部科学省・厚生労働省，2020）」という通達を受けたことから、従来の目標に掲げられていた「看護技術が実施できる」という内容を変更し、その他は大幅な変更を行わず、以下の4つを実習目標とした。

目標1：妊婦、産婦、褥婦および新生児の特徴を理解し、対象に応じた看護を実践するための基礎的な能力を養う。

目標2：妊娠・分娩・産褥・新生児期における対象の状態をアセスメントし、妊産褥婦・新生児の身体的、心理・社会的特徴を理解できる。

目標3：妊娠・分娩・産褥・新生児期をより順調に経過するための対象に必要なケアを見出し、支援につなげることができる。

目標4：病院の母子看護における看護職の役割を理解できる。

2. 臨地での母性看護学実習の概要

「少子化時代における母子を取り巻く環境および、対象のニーズに合った母子への継続支援の実際を学び、母子保健における今後の看護職の役割を考察する。」ことを目的とし、医療施設の産科病棟において2週間の臨地実習を展開している。実習時間は2単位90時間である。医療施設では、妊娠期から産褥・新生児期まで周産期の一連の流れの中で対象を理解していけるよう、妊婦健診から産後1か月健診の見学まで幅広い内容の実習を行っている。

3. 母性看護学実習の位置づけ

A 大学看護学部では、看護の専門分野Ⅱにおいて母性看護学が配置されており、「母性看護学概論（2年次秋学期開講）」「母性看護援助論Ⅰ（3年次春学期開講）」「母性看護援助論Ⅱ（3年次秋学期開講）」「母性看護学実習（4年次春学期開講）」で構成されている。3年次に成人看護学実習（急性期・慢性期）、小児看護学実習、精神看護学実習、老年看護学実習の臨地実習を終えている。

V. オンライン実習の展開

1. 2020年度母性看護学実習履修者

A 大学看護学部4年次生82名（女子学生75名、男子学生7名）。

2. 事前学習

学生は、3年次秋学期に「母性看護援助論Ⅱ」を履修後、2020年1月下旬より母性看護学実習に向けての事前学習に取り組んでいた。事前学習は、臨地実習を想定したもので、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の看護に必要な知識をまとめたミニノートの作成と、それぞれの時期に応じた一般的な看護計画を立案してくるという内容であった。学生は事前学習に長期休暇の時間を割いて取り組んでいるため、事前学習の内容を生かせる構成となるよう検討した。

3. オンライン実習期間

2020年6月15日～6月26日までの2週間。

4. オンライン実習環境

学生は、実家および一人暮らしの自宅からの参加であった。教員と学生が同時時間帯にZoomを利用して互いにやり取りを行い課題解決していく同期型のオンライン実習とした。

オンライン環境は、1年次より1人1台ノートパソコンを貸与されている。また、教科書についても紙媒体のほかに電子版がノートパソコン上で利用できるようになっている。プリンターやWi-Fiなどの準備は学生個人で行った。実習要項には必要な参考図書を提示しているが、大学への入構が制限されており、大学図書館の利用はできない。そのためオンライン実習で利用する動画資料（DVD、動画コンテンツ、YouTube動画）はポータルサイトを通してZoomで視聴できるように設定した。

5. オンライン実習スケジュール

実習時間は、通常の授業時間に合わせ9:00～17:00とした。臨地実習で行う妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期・帝王切開の看護について動画資料や教員によるロールプレイングを通し、看護過程の展開や看護技術が学べるように授業を構成し、能動的に取り組めるようグループワーク（以下、GW）を多く取り入れた（表1）。

6. グループ編成

臨地実習では、1グループを5名～8名で編成している。今回は、実習内容によって5～6名の小グループ（全16グループ）と、10～11名の大グループ（全8グループ）を作成し、グループダイナミクスを活かせるよう、固定グループとした。小グループ（以下、小G）は発言がしやすいことを活かし、主に看護計画の立案を行う時に用いた。大グループ（以下、大G）は、1日のまとめや振り返り、看護の役割など、実

表1 オンライン実習スケジュール

日程	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
事例想定	妊娠期 (妊娠36週)	妊娠期 (妊娠後期+貧血)	分娩期 (経膈分娩当日)	産褥期 (分娩直後~1日目)	産褥期 (産褥2~3日目)
実習テーマ	・妊婦健診、保健相談 ・妊娠期アセスメント	・妊娠期の異常と看護	・分娩期アセスメント ・分娩期の看護の役割	・出生直後の看護 ・産褥期の特徴	・産褥期・新生児期の看護
実習内容	・オリエンテーション ・DVD視聴／事例1 「妊婦健診・保健相談」 ・アセスメント検討(個人) ・カンファレンス(大G) (アセスメントの共有)	・DVD視聴 「貧血の保健指導」 ・妊娠期の異常と看護に関するGW(小G) ・GW発表 ・妊娠期小テスト	・YouTube視聴 「経膈分娩の経過」 動画解説／事例2 ・胎盤計測解説 ・知識確認(指名制) ・看護計画のGW(小G) ・カンファレンス(全体) (看護計画の共有) ・分娩期小テスト	・動画コンテンツ視聴 「出生直後の新生児」 「分娩直後の褥婦」 動画解説 ・手順書作成(個人) ・カンファレンス(大G)	・DVD視聴 「産褥2日目の褥婦」 動画解説／事例3 ・手順書のGW(小G) ・代表グループによるロールプレイング (新生児・褥婦の観察) ・動画コンテンツ視聴 「新生児の看護」 「乳房ケア」
日程	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
事例想定	産褥期 (産褥3~4日目)	産褥期 (退院前・産後1か月)	帝王切開 (帝王切開当日)	帝王切開 (帝王切開後1日目)	最終カンファレンス
実習テーマ	・看護計画 ・看護援助の計画発表	・退院後の育児支援 ・地域との連携	・帝王切開と看護	・帝王切開後1日目の看護	・母子保健における看護職の役割 ・生命の尊厳
実習内容	・DVD視聴 「産褥3日目の褥婦」 「新生児の看護」 ・看護計画、評価のGW(小G) ・全体共有 ・カンファレンス(大G)	・DVD視聴 「退院指導」 「1か月健診」 動画解説 ・看護要約(個人) ・看護要約全体共有 ・カンファレンス(大G)	・YouTube視聴 「帝王切開当日」 動画解説 ・知識確認(指名制) ・看護計画のGW(小G) ／事例4	・DVD視聴 「帝王切開後1日目」 ・看護計画、評価のGW(小G)、全体共有 ・カンファレンス(大G) ・帝王切開・新生児期小テスト	・資料作成(GW) ・最終カンファレンス ・実習まとめ ・アンケート

習内容や到達目標に合わせ、日々カンファレンスを行う時に用いた。最終カンファレンスのみ、41名ずつの2グループに分けて行った。

7. 教員の役割

オンライン実習は、母性看護学領域を担当する5名の教員で担当した。1名は全体を統括し、残り4名の教員で周産期の各期の進行を担うとともに、Zoomの管理や学生への対応、トラブルへの対応、カンファレンスの担当など様々な役割を担った。

8. 実習目標の達成に向けた実習内容の工夫

目標1「妊婦、産婦、褥婦および新生児の特徴を理解し、対象に応じた看護を実践するための基礎的な能力を養う」に対し、対象の特徴理解のために、国家試験の出題基準に沿って知識を深める時間を設けた。指名制で教員が学生に質問を行い、学生が持っている知識を活用する機会とした。また、学生の知識の定着のために各期に小テストを実施した。

目標2「妊娠・分娩・産褥・新生児期における対象の状態をアセスメントし、妊産褥婦・新生児の身体的、心理・社会的特徴を理解する」に対しては、受け持ち事例を想定して、看護過程の展開のうちアセスメントや看護診断を行った。受け持ち事例は、経膈分娩の妊娠期・分娩期・産褥期から各1事例と、帝王切開の産褥期1事例の合計4事例とした。事例の経過が理解しやすいように妊娠期から産褥・新生児期へと順序性をもたせた。受け持ち事例の母子の状態のアセスメントは個人作業後にグループで共有することで、グループダイナミクスにより、事例や看護過程の理解が深められるように工夫をした。

目標3「妊娠・分娩・産褥・新生児期をより順調に経過するための対象に必要なケアを見出し、支援につなげることができる」に対しては、看護過程の展開のうち、看護計画の立案から評価までを行った。受け持ち事例には、実際の対象者の反応が理解できるように動画資料を用いた。看護計画の立案は、個人学習の時間を設け

た上で、小GのGWで行った。その後全体での計画発表と意見交換を行い、教員からのフィードバックや評価を伝えることを重視した。

看護計画における観察（OP：Observation Plan）の実施は、手順書を作成し、その手順書をもとにロールプレイングを実施した。ロールプレイングでは、学生の代表が対象者役（教員）とコミュニケーションをとりながら、学生役（教員）に観察方法を口頭で指示し対象者の観察を行った。オンライン実習では実際の対象者へのケアの実施はできないため、技術の根拠やプライバシーの配慮等の注意点、観察ポイントを押さえることで技術を実施できない状況を補った。

看護計画における直接的ケア（TP：Treatment Plan）や指導的ケア（EP：Education Plan）の実施は、動画資料で実施されたケアを学生が実施したと仮定し、看護過程を展開した。

目標4「病院の母子看護における看護職の役割を理解できる」に対しては、2週間の実習を通して、病院など医療施設から地域保健へとつなげていく切れ目のない支援を考えられるよう、最終日のカンファレンステーマに設定した。また、出産や帝王切開の動画視聴を行うことで、分娩期の見学を補い、生命の尊厳について考えるきっかけになることをねらいとした。

9. オンライン実習を行う上での配慮

教員、学生共にオンライン実習は初めての試みであり、学生の不安が大きいのではないかと推察されたため、授業開始時にアイスブレイクの時間を設けた。また、通信状況による不具合も考慮し、参加予定者全員の出席を確認して開始した。学生が主体的に学べるように、その日の実習目標と行動計画の確認を行った。また、発言者が萎縮しないよう、学生からの発言や回答には肯定的に対応し、Zoomの開始や退出時には顔を映して笑顔で声をかけるように配慮した。質問はその都度、口頭とチャット機能でも

受け付け、GW中も必ず教員がZoomに待機し、すぐに対応するよう努めた。実習時間以外では、ポータルサイトのフォーラム機能を利用し、個別メールでの質問への対応も行った。

カンファレンスは、質の担保を図るために教員が参加し、大Gで時間帯をずらして実施した。カンファレンステーマは、学生が設定するための時間確保が困難であったため、1日の実習目標を達成することを目的に教員が設定した。

図書館の利用ができないため、オンライン実習は教科書および過去の授業資料のみで対応できる内容とした。受け持ち事例の設定については、視覚的にも理解しやすいように動画資料を使用した。さらに、不足している内容については、教員が事例の背景や検査データなどを追加で作成し、提示した。臨地実習では、対象者の看護を行うことが中心であるため、短時間での情報収集が求められ、情報を得て看護計画の修正を行う時間は限られている。そこで、展開の速さを実感できるよう、情報の提示のタイミングを考慮した。今回、実習記録はポータルサイト上に提出できる記録をメインとし、発表資料等はZoomで共有できるように促した。

VI. 結果

1. 授業後アンケート結果

授業後アンケートは、履修学生82名中81名から回答が得られ（回収率98.8%）、その結果を表2に示す。

1) 実習目標の達成度

目標1は、「80%以上は達成できた」と回答した学生が54名（66.7%）、平均点は3.65（SD：0.50）であった。目標2は、「80%以上は達成できた」と回答した学生が52名（64.2%）、平均点は3.64点（SD：0.48）であった。目標3は、「80%以上は達成できた」と回答した学生が47名（58.0%）、平均点は3.54点（SD：0.57）であ

表2 実習目標、知識、学習方法の効果、実習全体の充実度

	80%以上 人数(%)	60%以上 80%未満 人数(%)	40%以上 60%未満 人数(%)	20%以上 40%未満 人数(%)	0%以上 20%未満 人数(%)
実習目標の達成度					
目標1	54 (66.7)	26 (32.1)	1 (1.2)	0 (0)	0 (0)
目標2	52 (64.2)	29 (35.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
目標3	47 (58.0)	31 (38.3)	3 (3.7)	0 (0)	0 (0)
目標4	61 (75.3)	18 (22.2)	2 (2.5)	0 (0)	0 (0)
知識に関する学習の達成度					
知識を深めること	63 (77.8)	18 (22.2)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
オンライン上の 看護実践への活用	56 (69.1)	24 (29.6)	0 (0)	1 (1.2)	0 (0)
学習方法の効果					
GW	65 (80.2)	15 (18.5)	1 (1.2)	0 (0)	0 (0)
カンファレンス	66 (81.5)	14 (17.3)	1 (1.2)	0 (0)	0 (0)
実習全体の充実度	68 (84.0)	12 (14.8)	1 (1.2)	0 (0)	0 (0)

った。目標4は、「80%以上は達成できた」と回答した学生が61名(75.3%)、平均点は3.73点(SD:0.50)で最も高かった。

2) 知識に関する学習の達成度

母性看護学の知識を深めることを、「80%以上は達成できた」と回答した学生は、63名(77.8%)で、平均値は3.78点(SD:0.42)であった。また、学習した知識を活かし、オンライン上の看護実践につなげられたことについては、「80%以上は達成できた」と回答した学生は、56名(69.1%)で、平均値は3.67点(SD:0.54)であった。

3) 学習方法の効果

GWについては、「80%以上が効果的だった」と回答した学生は、65名(80.2%)で、平均値は3.79点(SD:0.44)であった。

カンファレンスについては、「80%以上が効果的だった」と回答した学生は、66名(81.5%)で、平均値は3.80点(SD:0.43)であった。

4) 実習全体の充実度

オンライン実習を通じた充実度については、「80%以上充実していた」と回答した学生は、68名(84.0%)で、平均値は3.83点(SD:0.41)

であった。

5) 自由記述によるオンライン実習の評価と今後の課題

(1) オンライン実習の良かった点

オンライン実習の良かった点を記述した学生は、73名で110の記述、28のコード、9のサブカテゴリー、3のカテゴリーが抽出された。表3はカテゴリー、サブカテゴリー、コード、記述数を示す。以降、記述内容は“ ”、コードは【 】、サブカテゴリーは『 』、カテゴリーは< >で示す。

カテゴリーは<能動的に学べる実習環境><効果的な共同学習><充実した母性看護の学び>であった。

最も記述が多かったサブカテゴリーは、『効果的なGW』で30の記述がみられた。『効果的なGW』は、【相互学習により学びが深まった】【全員で同じ事例を共有することで学びが深まった】【自分で考える時間もあり、効果的だった】のコードで構成された。GW中心であったため色々な人の考えを共有して多角的に学ぶことができて良かった”等の記述があった【相互学習により学びが深まった】が最も多い結果であった。

その他に記述が多かったサブカテゴリーは、

表3 オンライン実習の良かった点

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	記述数	
能動的に学べる実習環境	学習意欲の向上	オンライン上の交流による安心感や一体感	7	
		グループ学習による意欲の向上	5	
		教員のポジティブな関わり	4	
		Zoomやパソコンを活用して主体的に学べた	1	
		意欲的な学びの効果を実感	1	
	負担軽減による充実した学び	移動時間を、睡眠や学習時間に充てられた	6	
		課題の提出時間が設定され、効果的に取り組めた	2	
		臨地に赴くストレスがなかった	2	
		経済的負担が軽減された	1	
		資料をすぐに確認でき、効果的な活用ができた	4	
	学びやすい実習環境	教員に質問しやすかった	3	
		パソコンを効果的に活用できた	2	
		見通しを立てながら実習できた	1	
	効果的な動画資料の活用	事例が動画だったのでイメージしやすかった	4	
		繰り返し視聴でき、学びが深まった	4	
		事例の情報を十分に活用できた	1	
	効果的な共同学習	効果的なGW	相互学習により学びが深まった	20
			全員で同じ事例を共有することで学びが深まった	8
自分で考える時間もあり、効果的だった			2	
効果的なカンファレンス		カンファレンスを主体的に行えた	1	
		全体カンファレンスで学びが広がった	1	
充実した母性看護の学び	知識の定着や看護過程の理解	複数事例の看護過程を学べた	13	
		国家試験に向けた知識が定着できた	5	
		妊娠期から順序だった実習で、理解ができた	2	
	看護観の深まり	母性看護を幅広く学び、生命の尊厳も探究できた	4	
		母性分野以外にも看護の学びがあった	4	
	臨場感のある実習内容	実際に受け持ったように感じた	1	
		ロールプレイングが臨場感があった	1	

『知識の定着や看護過程の理解』が20記述で、【複数事例の看護過程を学べた】【国家試験に向けた知識が定着できた】【妊娠期から順序だった実習で、理解ができた】で構成された。その中で、“ハイリスク妊娠、正常分娩期、帝王切開すべてを学ぶことができた”“経陰分娩だけでなく帝王切開も学ぶことができ、幅広く学べたことはオンライン実習の強み”との記述があった、【複数事例の看護過程を学べた】が最も多かった。

『学習意欲の向上』は18記述で、【オンライン上の交流による安心感や一体感】【グループ学習による意欲の向上】【教員のポジティブな関わり】等で構成された。

(2) オンライン実習の難しかった点、困った点

オンライン実習で難しかった点や困った点を記述した学生は、55名で64の記述、16のコード、7のサブカテゴリー、2のカテゴリーが抽出された(表4参照)。

カテゴリーは、＜実習環境に伴う問題＞＜実践を通じた学びが不十分＞であった。

記述が多かったサブカテゴリーは、17の記述がみられた『発言しにくい環境』で、【オンラインによる話し合いの難しさや戸惑い】【全体では質問や発言がしにくかった】【カンファレンスの人数が多く、意見交換が難しかった】のコードで構成された。その中で、“気軽に質問をしにくいことや、対面で話すわけではないので、本当に言いたいことが伝わっているのか不安になった”“カンファレンスの時に進行を行

表4 オンライン実習で難しかった点、困った点

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	記述数
実習環境に伴う問題	発言しにくい環境	オンラインによる話し合いの難しさや戸惑い	9
		全体では質問や発言がしにくかった	5
		カンファレンスの人数が多く、意見交換が難しかった	3
	課題遂行に伴う支障	複数の事例による看護過程に混乱	8
		課題が多く、生活に支障があった	3
		参考図書が手元になくて困った	2
		提出方法の提示が分かりにくかった	1
	体調への悪影響	体調が悪くなった	11
	通信環境の問題	音声が聞き取りづらいことがあった	3
		プライバシーの確保が難しかった	3
実践を通じた学びが不十分	実際の対象との相違	立案した計画と動画の実践が違い、評価が難しかった	5
		事例の情報を得たり、反応を捉えるのが難しかった	4
	実践できない難しさ	実際に関わることによる学びが少なかった	3
		立案した計画を実施できず難しかった	2
	技術の習得が不十分	技術の習得が難しかった	2
		視聴覚教材が古く、適切なケアが戸惑った	1

表5 オンライン実習をより良くするための改善点

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	記述数
実習内容の工夫	カンファレンスの工夫	時間の使い方の工夫	8
		人数を少なくする	6
		学生主体で行う	2
	対象理解を深めるための工夫	事例の統一	5
		臨場感のある実習の工夫	3
		実習中の記録のフィードバック	2
		アセスメントを深める工夫	2
	効果的な学習の工夫	課題の提示方法	6
		GWの時間を長く設定	1
		知識の確認を少人数で行う	1
実習環境の調整	体調不良を防ぐ配慮	休憩時間をこまめに設ける	3
		体調不良への配慮	3
	オンライン環境への配慮	参加しやすいようにオンラインの環境を整える	3
		Wi-Fi環境の整備	1
	効果的な資料の提示	動画の事前活用	2
講義資料の提示	1		

った際、反応が少なく進行するのが難しかった”等、【オンラインによる話し合いの難しさや戸惑い】が最も多い記述があった。

その他に、『課題遂行に伴う支障』『体調への悪影響』『実際の対象との相違』のサブカテゴリーの記述が多かった。『体調への悪影響』には、眼精疲労・腰痛・浮腫・肩こり・頭痛などの症状があった。

(3) オンライン実習をより良くするための改善点

オンライン実習の改善点を記述した学生は、38名で49の記述、16のコード、6のサブカテゴリー、2のカテゴリーが抽出された(表5参照)。

カテゴリーは、<実習内容の工夫><実習環境の調整>であった。

最も記述が多かったのは、16の記述がみられた『カンファレンスの工夫』であった。“カン

ファレンス時間が30分の時などは、皆の意見を聞いて終わるのがほとんどだったので、意見交換の時間も含め毎回1時間程度として頂きたい”“カンファレンス内容を他グループと共有する時間があってもよい”等の【時間の使い方の工夫】の記述が多くみられた。

次に多かったサブカテゴリーは、『対象理解を深めるための工夫』が12記述で、その中で“妊娠期、分娩期、産褥期の事例の設定を同一人物にしたほうが各期の流れを理解しやすくなる”等の【事例の統一】の記述が多かった。『効果的な学習の工夫』は8記述で、“課題の詳細が書いておらず分からないことが何度かあったので、事前の説明をより詳しくしてもらえるとよりスムーズに取り組める”等の【課題の提示方法】が多くの記述があった。

その他、『体調不良を防ぐ配慮』として、【休憩時間をこまめに設ける】、“宿題を手書きでもOKにする”“目の疲れがひどく、事例の情報は前日か当日の朝にアップして頂き、コンビニでコピーを行いたかった”等の【体調不良への配慮】があった。

VII. 考察

看護学実習とは「学生が既習の知識・技術を基にクライアントと相互行為を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた現象を教材として、看護実践能力を習得するという学習目標達成を目ざす授業である」(杉森ら, 2018)と定義されている。今回、母性看護学実習の全てをオンラインで実施するにあたり、学生に不利益を及ぼすことなく遂行していくことが、教員に課せられた命題であった。

授業後アンケートによる学生からの回答をもとに、オンライン実習の目標の達成度および、良かった点、難しかった点を明らかにし、実習内容の振り返りと今後の課題を考察する。

1. 実習目標の達成度について

目標1は、対象の理解とその看護を行うための基礎的な能力を養う目標であり、66.7%の学生が「80%以上達成できた」と回答した。臨地実習で獲得する知識は看護師国家試験を受験するうえでも重要な知識である。そのため、臨地実習を想定し、各期の知識を深める時間を設定した。学生の自由記述からも【国家試験に向けた知識が定着できた】とあり、知識の定着につながる内容となった。

臨地実習では、受け持ちの承諾が得られた母子を対象に実習を展開していく。さらに、実習初日の状況に合わせて対象を選定するため、妊娠期・分娩期・産褥期と順を追って受け持つことや、同じ対象を受け持つことは現実的には困難である。ゆえに、学生は、周産期の一連の流れとして理解しにくいこともある。今回は、教材の都合により事例の統一はできなかったが、妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の順序性を考慮して実習計画を立てた。自由記述でも【妊娠期から順序だった実習で、理解ができた】とあり、一連の流れとして対象の理解が深まった。また、臨地実習では1人の学生が経膈分娩と、帝王切開の褥婦を受け持つということは難しいが、今回は両方の事例を用いて看護過程を展開した。【複数事例の看護過程を学べた】という内容からも、2つの分娩様式の実例を用いて、看護過程の展開を行うことで、帝王切開を受ける産婦の思いを知るなどの新たな発見や、知識の確認ができ、対象理解につながっていた。一方で、【複数の事例による看護過程に混乱】という記述もあったため、限られた期間で効果的に行うためには、妊娠期・分娩期・産褥期を同一事例で展開するなど、『対象理解を深めるための工夫』が必要だった。

目標2は、アセスメントを行い対象の身体的・心理的・社会的特徴を理解すること、目標3は、具体的な支援方法を見出し支援につなげていくことを目標としており、それぞれ、64.2%、58.0%の学生が「80%以上は達成できた」

と回答した。今回は、動画資料の対象者を用いることで、紙上の事例よりも明確にイメージでき、具体的な支援方法については、グループや全体での看護計画の意見交換や共有により検討できた。このように意図的にGWやカンファレンスを活用したことで、【相互学習により学びが深まった】【全員で同じ事例を共有することで学びが深まった】という学生の記述内容があり、相互学習の効果を実感できていた。先行研究では、学生同士が相互作用しあえる学習体験は、自分以外の異なる意見に対する興味を引き出し、学生の考えの発展に効果があった（中村ら、2010）。また、学生間の討議を中心としたGWは、問題解決能力、批判的思考力、自己教育力、コミュニケーション能力などの修得にも有効な学習方法であり、特に専門職として不可欠だ（舟島、2017）とも言われており、GWやカンファレンスによる学生同士の＜効果的な共同学習＞により対象者を多面的に、また深く捉えられていた。さらに、そのことは＜充実した母性看護の学び＞に影響し、実習目標の達成感につながったと考える。

しかし、目標3は「80%以上は達成できた」と答えた学生の割合が58.0%と低かった。理由として具体的な技術の実施や対象への関わりは経験できなかったことが考えられる。その技術経験の不足を補うため、褥婦と新生児の観察場面のロールプレイングを行い、全員で共有した。このことが『臨場感のある実習内容』となり、【実際に受け持ったように感じた】という学びとなっていたが、その方法については課題が残った。

目標4は、母子保健における看護職の役割を理解するという目標であり、75.3%の学生が「80%以上は達成できた」と回答し、4つの目標の中で最も高い達成度であった。実習最終日に、「母子保健における看護師の役割」というテーマでカンファレンスを行い、2週間の実習内容の学びを統括した結果、病院に限らず地域との連携や家族への関わりなど、幅広い学びが

できていた。最終カンファレンスにおいて、自分自身の学びを振り返るとともに、他者からの学びや意見を共有し、【全体カンファレンスで学びが広がった】ことで、達成感につながっていったと考えられる。

2. 実習内容について

1) オンライン実習の良かった点について

授業後アンケート結果において良かった点として、＜能動的に学べる実習環境＞＜効果的な共同学習＞＜充実した母性看護の学び＞が挙げられた。

今回のオンライン実習期間中は、コロナ禍で先が見えず、学生は閉塞感や孤独感を感じ、加えて、臨地実習の中止による不安なども大きいと推察できた。そのため、教員は緊張や不安をほぐすための配慮や肯定的な関わりを行った。その結果、学生も【オンライン上の交流による安心感や一体感】を感じており、オンラインであっても学生同士の交流や、【教員のポジティブな関わり】によって、『学習意欲の向上』がみられた。鈴木ら（2019）は、学生と指導側との相互作用で学びの意欲が高まる様相の中心は、指導側の認める関りや丁寧な関りであったと述べており、今回、教員が学生に向け行った関わりも、同様の効果を得られていたと考えられる。

オンライン実習は、学生は個の空間で終始画面に向き合っている状態である。学生と教員の双方とも、1人1人の状況把握が難しい状況であった。また、看護過程については、同一ではない対象者の事例を複数展開することの混乱も想定された。そこで、教授するにあたり心がけていたことは、動画資料の視聴前後やZoom退室時など、複数回にわたって課題の内容を文書と口頭で説明し、質問を受け付けた。さらに、看護過程の展開に必要な情報は教員が追加で作成しポータルサイト上に提示した。それらの取り組みは『学びやすい実習環境』『効果的な動画資料の活用』として学生の実習環境を支える

ことができた。また、全日オンライン実習であったため、【移動時間を、睡眠や学習時間に充てられた】等の意見からも、身体的、精神的、また経済的な『負担軽減による充実した学び』となり、これらが＜能動的に学べる実習環境＞につながったと考える。

看護過程の展開においては、個人学習→グループ学習→全体での発表→意見交換・教員評価というプロセスを重視した結果＜効果的な共同学習＞を行うことができた。U.S. Department of Education (2010)によると、オンライン授業の指導の効果は対面授業の指導の効果と同等であること、オンライン授業を効果的にする要素としては、学生の学習経験が挙げられ、1人で能動的な学習をすることよりも教員から指示や説明を受けることや相互的な学習をすることがより効果的であることが明らかにされている。

さらに、分娩の場面を視聴し、【母性看護を幅広く学び、生命の尊厳も探求できた】と、『看護観の深まり』を実感していた。学生は、分娩見学を通して、人が生まれてくること自体を奇蹟であると捉えるに至っている（井田，2011）とあるように、学生は「生命の尊厳」について考察し、看護観の構築をしていた。

実習を通しての充実度は、84.0%の学生が「80%以上充実していた」と回答し、オンライン実習の工夫やプロセスが、オンラインではあっても、実習としての充実度をもたらしたと考える。以上より、＜能動的に学べる実習環境＞を提供し、同期型で、＜効果的な共同学習＞を取り入れることで、＜充実した母性看護の学び＞が得られることが示唆され、学生の回答からも実習目標の達成につながったと考えられた。

2) オンライン実習の難しかった点と今後の課題

授業後アンケート結果において難しかった点として、＜実習環境に伴う問題＞＜実践を通じた学びが不十分＞が挙げられた。1つ目に『体調への悪影響』については、オンライン環境下

で短期間の準備となり、実習内容や時間配分を十分に検討ができなかったことや、長時間のオンライン環境が2週間続くことによる影響をイメージできなかったため、体調への配慮が十分にできなかった。改善点としては、＜実習環境の調整＞として、『オンライン環境への配慮』を行うとともに『体調不良を防ぐ配慮』が挙げられた。休憩時間のこまめな配置や、画面を見続けなくても課題に取り組めるよう紙媒体での提出も考慮するなど、十分な配慮を行う必要性が示唆された。

2つ目に『課題遂行に伴う支障』については、【複数の事例による看護過程に混乱】や【課題が多く、生活に支障があった】ことが挙げられた。課題の提出期限を実習日当日に設定しており、学生は、実習時間外も引き続き課題に取り組んでいた。課題の量や遂行に必要な時間に関しては、教員と学生の間に認識のずれがあったと考えられる。このずれは、臨地実習であれば、その場で相談でき、対応が可能である。今回、学生は教員が想定した以上にGWに時間を費やしていた。グループ単位での学習が多かったため、個人の課題の遂行状況や生活状況までの配慮は困難であった。改善点としても【課題の提示方法】が挙げられており、課題の内容や提示方法の工夫について、今後も検討が必要である。

3つ目に『通信環境の問題』では、学生の多くは、家族との生活の中でオンライン実習を行う環境であり、【プライバシーの確保が難しかった】ことも困ったことの1つであった。教員側も、オンラインの対応は不慣れであったため、起こりうる問題を事前に周知し、注意を促していくことができなかった。

4つ目に『発言しにくい環境』については、カンファレンスに関する記述が多かった。GWが効果的に行えた一方で、全員での受講という状況による10名以上のカンファレンスは、学生によっては『発言しにくい環境』であった。教員が全ての時間をカンファレンスに参加できな

くても、有意義な意見交換ができるよう、グループの人数の検討や、時間設定の工夫などの『カンファレンスの工夫』について検討も必要であった。今後は＜実習環境の調整＞を考慮したオンライン授業および実習の展開が求められる。

他方、臨地実習ができないことで、＜実践を通じた学びが不十分＞であった。学生は『実際の対象との相違』や、『実践できない難しさ』を感じていた。ロールプレイングの視聴を通して臨場感が感じられた反面、実際の対象者に対し、看護を実施できないことに関してのジレンマを感じていたと推察できる。これはオンライン実習の限界ともいえる。

全てをオンラインで実施した今回の実習では、困難な側面もあるが、今後、新しい生活様式の中で、学内実習を併用することで、ある程度の技術の習得や看護の実際を学ぶことは可能であると考えられる。前述の報告書によると、オンライン授業と学内授業を組み合わせた場合、平均して対面授業のみの場合より学習効果が高かった事が明らかにされている (U.S. Department of Education, 2010)。今後も実習施設の確保や日数等の制限がある場合は、オンライン実習と学内実習、臨地実習を併用するなどの新たな実習の形を模索することが必要であると考えられる。

今回のオンライン実習から得た経験や学生からの貴重な意見を参考にし、今後も工夫を重ねていきたい。

まとめ

オンライン実習の目標は、授業後アンケートの結果からおおむね80%以上達成できていた。

目標達成に向けた実習内容の工夫は、学生の＜能動的に学べる実習環境＞＜効果的な共同学習＞＜充実した母性看護の学び＞につながっており、実習の充実感をもたらすことができた。

一方で、オンライン実習では、＜実習環境に

伴う問題＞が明確となった。また、学生は＜実践を通じた学びが不十分＞であると感じていた。そのため、臨地実習や実践を通じた学びが重要であり、学内実習等で補う必要性が示唆された。

今後の課題として、＜実習内容の工夫＞＜実習環境の調整＞が必要である。

引用文献

舟島なをみ (2017). 看護学教育における授業展開 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて. 医学書院：東京.

井田歩美, 齊藤早苗 (2011). 母性看護学実習における学生の学びと実習目標との関連性. ヒューマンケア研究学会誌, 2 (1), 36-40.

文部科学省 (2020). 新型コロナウイルス感染症対策に関する大学等の対応状況について. https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000004520_10.pdf, (検索日：2020年10月4日)

文部科学省・厚生労働省 (2020). 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について (事務連絡). <https://www.mhlw.go.jp/content/000603666.pdf>, (検索日：2020年10月4日)

中村恵子, 竹谷英子, 佐藤政枝, 守田恵理子 (2010). 学生の自己教育力を伸ばす討議学習の導入とその評価. 名古屋市立大学看護学部紀要, 第9巻, 3-12.

太田操 (編) (2017). ウェルネス看護診断にもとづく母性看護過程 第3版, 医歯薬出版：東京.

杉森みどり, 舟島なをみ (2018). 看護教育学 第6版, 医学書院：東京.

鈴木由紀子, 佐藤直美 (2019). 看護学実習における指導者・教員との相互作用で学生の学びの意欲が高まる様相. 日本看護医療学会雑誌, 21 (2), 1-12.

U.S. Department of Education (2010). Evaluation of Evidence-Based Practices in Online Learning: A Meta-Analysis and Review of Online Learning Studies.

URL: <https://www2.ed.gov/rschstat/eval/tech/evidence-based-practices/finalreport.pdf> (2020/10/4 accessed)